

命の尊さに差別はないとは云うものの・・・

特に災害時には多くのことを考えさせられます。

阪神・淡路大震災の犠牲者は本当に6,434人か？

兵庫県南部地震では、建物崩壊や家具の下敷き、その後の火災など、地震災害による直接の死者数は5,500人強であり、残りの900人余りの死者は、地震から数年間のうちに病気や過労などで地震と関連して亡くなったことが弔慰金の支給等によって公認され、被害統計の確定報に加えられたものである。地震から年月が経過すると共に直接死と関連死の存在が曖昧となり、最近では専門家やマスコミ関係者の中にも上記の6,400人余をすべて直接死と勘違いしている人が多い。

東京都による首都直下地震の死者見積り5,638人とは？

被害想定は防災行政の基本でもありきわめて重要なもの。しかし根拠の非常に曖昧な死者の数の推定見積りを有効数字4桁も表示するとは本当に『命の尊さ』を理解した上でのことだろうか？

死者7万人の四川大地震で賞賛された日本の緊急援助隊

わが国の緊急援助隊が四川地震の被災地に入った時、生存者救助が可能な活躍の機会は既に失われていたとのこと。しかし収容した母子の遺体に整列して黙祷を捧げた緊急援助隊の行為に対し『この母子ほど敬意を払われた犠牲者はいない』と現地の人々の心を揺さぶり賛辞が沸いたとのことであった。

史上最悪の人道危機と報じられたハイチ大震災

死者30万人以上とも云われる2010年1月のハイチ大震災では、多くの犠牲者が検死も行われないうまま集団埋葬され、震災直後から史上最悪の人道危機と報じられていた。

村上春樹氏のエルサレム賞受賞スピーチ『壁と卵』

エルサレム賞の受賞講演で村上春樹氏は『高く強固な壁(システム)と、それにぶつかって割れる卵があるなら、どれだけ壁が正しく、どれだけ卵が間違っていようとも、私は常に卵の側に立つ』と述べて注目された。これは一作家の信条としてのみならず、壁を建築基準法や建設業界に卵をエンドユーザーや被災者に置き換えてみれば、建築構造設計や地震防災に携わる立場からも肝に銘じておくべき金言ではないかと思われる。

天声人語

想像するのむづかしいが、中国の地震被災地では、まだ多くの人ががれきに埋まっている。いまでも細く命の灯をともしているかもしれない。時間はしかし、待つてはくれない。刻一刻と過

ぎて灯を吹き消していく▼現地では時間と競争して、秒針の音を聞くような思いだったろう。派遣されていた日本の国際緊急援助隊が、きのう帰国した。懸命の作業にもかかわらず、生存者を救い出すことはできなかった▼へ一寸の光陰軽んずべからずと中国宋代の詩の一節にある。軽んじたわけではあるまいが、中国政府からの要請は遅れた。発生から72時間で、がれきの下の生存率はぐっと落ちる。時間との「真剣勝負」では、初動の遅れを取り戻すのは難しい▼救えなかった無念は残るが、忘れがたい印象も残した。最初の現場でのこと、収容した母子の遺体に整列して黙禱をささげた。その姿が報じられると、中国人の心を揺さぶって、賛辞がわいた。この母子ほど敬意を払われた犠牲者はない。そんな声も伝わっている▼援助隊が戻った成田空港には、出迎える中国人留学生らの姿があった。日中の国民は、しばしば感情をぶつけ合ってきた。わだかまりを和らげたいと双方が願うとき、立ち返るべき一つの記憶に、この「黙禱」はなるかもしれない▼「禍がないことより大きな幸せはない」と中国の古典に言う。格言の崩れ去った惨状の地に、入れ替わりに日本の医療チームが入った。救える命を一人でも多く救ってほしい。禍の土地から芽ぶき花咲く、信頼や友情があると信じたい。

朝日天声人語
2008.5.22.



黙禱

17日に母子の遺体の前で黙禱(もくごう)した日本の緊急援助隊員ら(新華社) II AP

天声人語

時事川柳を育てた一人に小説家の野村胡堂（1849-1920）がいる。明治末、当時の報知新聞に入り、社会部長時代に賞金つきの川柳欄を設けた。自ら選者を務めた胡堂が後に、「不朽の名作」と挙げた

朝日天声人語
2011.1.17.

のがへするが町広重の見た富士が見え」だ▼駿河町（現静岡市）とは今の東京・日本橋、三越かいわいで、江戸の昔は富士見の名所だった。関東大震災で高樓が軒並み崩れ落ち、同じ場所から、67年前に広重が描いた通りの靈峰が望める。そんな放心の句は、焼け野原と化した都の姿を17音に刻んだ▼16年前のきよう、神戸あたりのスカイラインも一変した。大揺れの後の薄明に浮かんだのは、全壊10万余棟のゆがんだ街だった。幾筋もの煙を上げる屋根の下で、六千数百の命が尽きた。悲しい記憶を塗り込めるように、がらりと趣を変えた街区も多い▼阪神大震災の被災地の区画整理がようやく完了するという。甲子園球場66個分の土地に道が引き直され、生まれ育った一角を公園にされた人もいる。子や孫に安全な街をという願いが、反発を包み込んだ▼震災翌年の秋、神戸で催した読者との集いを思い出す。出演してくれた地元の川柳作家、故時実（1924-2008）新子さんは、あの朝、机を亀のように背負って絞り出した一句を改めて詠んだ。〈平成七年一月十七日 裂ける〉▼すさまじい体験ほど伝えるのが難しい。「裂けた心」は、たやすく字や声になるものではなからう。片や震災を知らぬ世代の先頭はもう高校生だ。景色や住人は移ろい、あの惨状と、整然たる支え合いを語り継ぐ意思が、年を追って大切になる。

四川大地震におけるわが国の国際緊急援助隊の活動の様子を紹介した前ページの天声人語には多くの読者が感銘を受けたのではないかと思われる。ところが同じ天声人語の今回の記述には反対に失望させられてしまった。兵庫県南部地震から16年が経過したとは云え、筆者は震災直後の犠牲者の数をもう忘れてしまったのだろうか？

オバマ1年目の蹉跌 **経済学、再考**
 ニュースウィーク日本版 定価 450円

Newsweek

史上最悪の人道危機
ハイチの悲劇



2010年1月15日

2010年1月15日 金曜日
 夕刊 evening

ハイチがれきの首都



生き埋め 救出難航

2010年1月15日

朝日新聞

2010年1月15日

2010.1.15.

2010年(平成22年)2月11日 木曜日

ハイチ震災 貧富で明暗

大震災1カ月

ハイチ大震災から、1月14日は1カ月になる。ハイチ政府高官が11日、死者数は少なくとも10万人に達したと発表。犠牲者の数も、約25万人を上回る情勢となった。今もなおがれきに覆われた首都の救助活動は行われていない。中東米で最も貧しいハイチが歴史的に最も惨状に陥った。社会の階層別にも、ハイチ大震災は、貧しい人々を苦しめた。ハイチ大震災は、貧しい人々を苦しめた。ハイチ大震災は、貧しい人々を苦しめた。

ハイチ大震災による犠牲者の現状	
(国連、ハイチ政府などによる推定)	
死者	少なくとも23万人の遺体を埋葬
けが人	30万人
家を失ったか、居住不能な人	120万人
(緊急食料で支えられず)	27万人
食糧援助を必要とする人	200万人
被災者総計	300万人

配給奪い合い ■ 豪邸街は平穏

2010.2.11.

2010年(平成22年)1月24日 日曜日

「最悪の人道危機」

国連、ハイチ支援要請

現地政府「捜索を終了」

「私は元気」

2010.1.24.

僕はなぜ

エルサレムに行つたのか



村上春樹 著

賞を辞退せよ、との声。それでも伝えたかったこと

村上春樹

(156)

BUNGEISHUNJU 2009.4

二月十五日、僕はイスラエルでエルサレム賞を受賞し、スピーチを行いました。

一月下旬に受賞が報じられてから、辞退するべきかどうか声がインターネットで高まりました。一部の新聞からは、大阪のNGOが出した公開質問状について答えるべきだと求められました。

イスラエル軍のガザ侵攻に抗議し受賞を辞退すべきだという意見は、予想していました。僕自身、受けるべきかどうかずいぶん迷ったからです。でも事前にそれについて意思表明を求められるのは、少し筋が違うように思いました。僕は僕なりに様々な要素を深く考慮し、個人の資格でエルサレム行きを決断したわけです。自分の下した決断に

ついて、事前に弁解したり釈明したりするのは、もともとあまり好きじゃない。黙って出かけて行って、やるべきことをやって帰ってこようというのが僕の思いでした。そのときは肝心のスピーチの方に意識を集中したかった。その結果、僕の発言したことで批判されるのなら仕方ありません。自分がこうしようと決めたことだから、甘んじて批判は受けます。

友人や親しい編集者からも、行かないほうがいいんじゃないかという忠告のメールをもらいました。ただ僕は新しい長編小説やらチャンドラーの翻訳やらのゲラを三冊分、四百字詰めで四千二百枚分ぐらい抱えていて、イスラエルに行く前にそれを片づけなくてはならない。(以下略)

「壁と卵」(エルサレム賞受賞スピーチ)

私は一人の小説家として、ここエルサレム市にやって参りました。言い換えるなら、上手な嘘をつくことを職業とするものとして、ということでもあります。

もちろん嘘をつくのは小説家ばかりではありません。ご存じのように政治家もしばしば嘘をつきます。外交官も軍人も嘘をつきます。中古自動車のセールスマンも肉屋も建築業者も嘘をつきます。しかし小説家のつく嘘が、彼らのつく嘘と違う点は、嘘をつくことが道義的に非難されないところにあります。むしろ巧妙な大きな嘘をつけばつくほど、小説家は人々から賛辞を送られ、高い評価を受けることとなります。なぜか?

小説家はうまい嘘をつくことによって、本当のように見える虚構を創り出すことによって、真実を別の場所に引き張り出し、その姿に別の光をあてることができるからです。真実をそのままのかたちで捉え、正確に描写することは多くの場合ほとんど不可能です。だからこそ我々は、真実をおびき出して虚構の場所に移動させ、虚構のかたちに置き換えることによって、真実の尻尾をつかまえてやうとするのです。しかしそのためにはまず真実のありかを、自らの中に明確にしておかななくてはなりません。それがうまい嘘をつくための大事な資格になります。

しかし本日、私は嘘をつく予定はありません。できるだけ正直になろうと努めます。私にも年に数日は嘘をつかない日がありますし、今日はたまたまその一日にあたります。

正直に申し上げましょう。私はイスラエルに来て、このエルサレム賞を受けることについて、「受賞を断つた方がよい」という忠告を少なからざる人々から受け取りました。もし来るなら本の不買運動を始めるといふ警告もありました。その理由はもちろん、このたびのガザ地区における激しい戦闘にあります。これまでに千人を超える人々が封鎖された都市の中で命を落としました。国連の発表によれば、その多くが子供や老人といった非武装の市民です。

私自身、受賞の知らせを受けて以来、何度も自らに問いかけました。この時期にイスラエルを訪れ、文学賞を受け取ることが果たして妥当な行為なのかと。それは紛争の一方の当事者である、圧倒的に優位な軍事力を保持し、それを積極的に行使する国家を支持し、その方針を是認するという印象を人々に与えるのではないかと。それはもちろん私の好むところではありません。私はどのような戦争をも認めないし、どのような国家をも支持しません。またもちろん、私の本が書店でポイコットされるのも、あえて求めるところではありません。

しかし熟考したのちに、ここに来ることを私はあらため

て決意いたしました。そのひとつの理由は、あまりに多くの人が「行くのはよした方がいい」と忠告してくれたからです。小説家の多くがそうであるように、私は一種の「へそ曲がり」であるのかもしれませんが、「そこに行くな」「それをやるな」と言われると、とくにそのように警告されると、行ってみたり、やってみたくなるのが小説家というもののネイチャーなのです。なぜなら小説家というものは、どれほどの道風が吹いたとしても、自分の目で実際に見た物事や、自分の手で実際に触った物事しか心からは信用できない種族だからです。

だからこそ私はここにいます。来ないことよりは、来ることを選んだのです。何も見ないよりは、何かを見ることを選んだのです。何も言わずにいるよりは、皆さんに話しかけることを選んだのです。

ひとつだけメッセージを言わせて下さい。個人的なメッセージです。これは私が小説を書くときに、常に頭の中に留めていることです。紙に書いて壁に貼ってあるわけではありません。しかし頭の壁にそれは刻み込まれています。こういうことです。

もしここに硬い大きな壁があり、そこにぶつかって割れる卵があったとしたら、私は常に卵の側に立ちます。

そう、どれほど壁が正しく、卵が間違っていたとしても

個人の魂の尊厳を浮かび上がらせ、そこに光を当てるためです。我々の魂がシステムに絡め取られ、貶められることのないように、常にそこに光を当て、警鐘を鳴らす、それが私が物語の役目です。私はそう信じています。生と死の物語を書き、愛の物語を書き、人を泣かせ、人を怯えさせ、人を笑わせることによって、個々の魂のかけがえのなさを明らかにしようとして試み続けること、それが小説家の仕事です。そのために我々は日々真剣に虚構を作り続けているのです。

私の父は昨年の夏に九十歳で亡くなりました。彼は引退した教師であり、パートタイムの仏教の僧侶でもありました。大学院在学中に徴兵され、中国大陸の戦闘に参加しました。私が子供の頃、彼は毎朝、朝食をとるまえに、仏壇に向かって長く深い祈りを捧げておりました。一度父に訊いたことがあります。何のために祈っているのかと。「戦地で死んでいった人々のためだ」と彼は答えました。味方と敵の区別なく、そこで命を落とした人々のために祈っているのだと。父が祈っている姿を後ろから見てみると、そこには常に死の影が漂っているように、私には感じられませんでした。

父は亡くなり、その記憶も——それがどんな記憶であったのか私にはわからないままに——消えてしまいました。しかしそこにあった死の気配は、まだ私の記憶の中に残っ

も、それでもなお私は卵の側に立ちます。正しい正しくないは、ほかの誰かが決定することです。あるいは時間や歴史が決定することです。もし小説家がいかなる理由があれ、壁の側に立って作品を書いたとしたら、いったいその作家にどれほどの値打ちがあるでしょう？

さて、このメタファーはいったい何を意味するか？ ある場合には単純明快です。爆撃機や戦車やロケット弾や白磷弾や機関銃は、硬く大きな壁です。それらに潰され、焼かれ、買かれる非武装市民は卵です。それがこのメタファーのひとつの意味です。

しかしそれだけではありません。そこにはより深い意味もあります。こう考えてみて下さい。我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにひとつの卵なのだ。かけがえのないひとつの魂と、それをくるむ脆い殻を持った卵なのだ。私もそうだし、あなた方もそうです。そして我々はみんな多かれ少なかれ、それぞれにひとつの硬い大きな壁に直面しているのです。その壁は名前を持っています。それは「システム」と呼ばれています。そのシステムは本来は我々を護るべきはずのものです。しかしあるときにはそれが独り立ちして我々を殺し、我々に人を殺させるのです。冷たく、効率よく、そしてシステムティックに。

私が小説を書く理由は、熱く詰めればただひとつです。

私には父から引き継いだ数少ない、しかし大事なものとひとつです。

私がここで皆さんに伝えたいことはひとつです。国籍や人種や宗教を超えて、我々はみんな一人一人の人間です。システムという強固な壁を前にした、ひとつひとつの卵です。我々にはとても勝ち目はないように見えます。壁はあまりに高く硬く、そして冷ややかです。もし我々に勝ち目のようなものがあるとしたら、それは我々が自らの、そしてお互いの魂のかけがえのなさを信じ、その温かみを寄せ合わせることで生まれてくるものでしかありません。

考えてみてください。我々の一人一人には手に取ることでできる、生きた魂があります。システムにはそれはありません。システムに我々を利用してはなりません。システムを独り立ちさせてはなりません。システムが我々を作ったのではなく、我々がシステムを作ったのです。

私が皆さんに申し上げたいのはそれだけです。エルサレム賞をいただき、感謝しています。私の本を読んで下さる人々が、世界の多くの場所にいることに感謝します。イスラエルの読者のみなさんにお礼を言いたいと思います。なによりもあなたがたの力によって、私はここにいます。私たちが何かを——とても意味のある何かを共有することができたと思います。ここにきて、皆さんにお話しできたことを嬉しく思います。